

ME13 工藤 大輔

指導教員 山館 順 准教授

## 1. 緒言

厚木市依知地区には、以前より古代中世の遺跡が密集する地域として知られており、特に古墳時代後期の群衆墳が多数存在することで知られている。[1]

遺跡の性格を示すものとして銭貨の成分比を測定した時に、近似した範囲内に収まっていれば、遺跡周辺の政治権力が何らかの形で、通貨に関する政策を強め規定の範囲内に収めたと考えられる。反対に成分比のばらつきが大きい場合には周辺各地域からの銭貨の交流を想定できる。

依知遺跡から出土した銭貨に対し非破壊検査による成分分析を行い、数値データ化し特徴と傾向の検討を行う。これにより、当時の依知の歴史背景や経済状況の把握の手がかりを得る事を目指す。

## 2. 研究のアプローチ

中世社会を伝える資料は戦争や災害などによって多くが失われており、文書史料だけでは近世以前の状況を解明するには不十分である。これを補完する手段として本研究が目的とする物質資料の分析が必要となる。中世銭貨は国内外無数の遺跡から出土しており 1 枚の銭貨から銭種の特定制や成分分析による製造法、産地同定の手掛かりなどの情報を引き出すことができる。[2]

依知遺跡から出土した 14 枚の銭貨を蛍光 X 線分析装置で成分分析を行う。昨年までの研究内容は銭貨の成分と直径を分析し製造場所を割り出し、銭貨の厚み、重量、文字の形状の測定を行い遺跡間でデータの比較を行った。今回は遺跡を一か所に絞り、より詳細な遺跡の性格を調査する。

## 3. 結果

2 で述べた成分結果のサンプルを表 1、表 2 表 3 に示す。

\*その他は銅、鉛、錫、鉄以外の成分の合計値を示した。

表 1:永楽通宝の成分

銭貨 ID	含有成分(mass%)				
	銅(Cu)	鉛(Pb)	錫(Sn)	鉄(Fe)	その他
11Fa18	66.1	15.0	9.23	0.353	9.32
11Fa40	63.4	16.5	7.65	0.911	11.53
11Fa50	58.4	20.4	7.82	0.991	12.45
11Fa59	36.9	37.4	7.08	1.11	17.54
11Fa70	45.4	31.1	4.58	0.769	18.19

表 2:洪武通宝の成分

銭貨 ID	含有成分(mass%)				
	銅(Cu)	鉛(Pb)	錫(Sn)	鉄(Fe)	その他
11Fb04	49.4	14.6	12.1	1.33	22.55
11Fb09	31.8	44.2	6.05	0.680	17.27
11Fb13	28.9	46.8	5.45	0.985	17.9
11Fb56	16.6	55.1	5.84	0.715	21.68
12Fb12	65.5	10.3	7.04	1.38	15.81

表 3:宣徳通宝の成分

銭貨 ID	含有成分(mass%)				
	銅(Cu)	鉛(Pb)	錫(Sn)	鉄(Fe)	その他
16Fc07	14.1	59.0	5.45	1.03	20.4
18Fc49	52.7	23.0	8.57	1.31	14.44
18Fc90	48.3	25.9	8.36	1.10	16.36
23Fc33	53.3	25.6	7.15	0.862	13.13

## 4. 結論

永楽通宝、洪武通宝、宣徳通宝の成分比の最大と最小の量がそれぞれ 30%、50%、35%と大きい。この点から他地域の様々な成分比の銅銭が混入している可能性が高く、上依知周辺における銭貨流通の活発な状況を想定することができる。

一方、銅銭の主成分である銅の比率は永楽通宝、洪武通宝に比べて宣徳通宝は 4 枚中 3 枚が 50%前後とまとまっており、宣徳の方が実際の流通に使用された可能性が高い。

また、12Fb12 より洪武通宝のその他の成分の中に中国を主産地とするアンチモン(Sb)をわずかに含有する 1 枚がある。

## 5. 今後の発展

直接ではないにせよ、これらの国内外の産地との間で何らかのつながりが存在するのかが、今後の検討課題として浮かび上がってくる。

また、中津川、相模川商水系の中世遺跡出土銭貨の成分比とも比較検討する余地があることを指摘したい。上依知周辺の中世遺跡からの出土銭貨との比較検討についても今後の課題となる。

## 文献

[1] 厚木市：“厚木市史中世通史編”，pp838,911-916,decem1991

[2] 櫻井晋一：“貨幣考古学序説”，慶応義塾出版会,pp21-26,29-30,sept.2009